

平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金（認知症研究開発事業）  
「認知症のための縦断型連携パスを用いた医療と介護の連携に関する研究」  
分担研究報告書

研究分担者 谷向 知 愛媛大学大学院医学系研究科 教授

**研究要旨** 「医療-介護連携のための火の国あんしん受診手帳【愛媛版】」（以下、手帳）を配布し、その利用状況や実際に利用しての感想を、介護者家族（以下、家族）、介護・福祉施設職員（以下、専門職）、かかりつけ医にアンケートを行い、手帳の有用性について検討した。利用状況に関しては「使用している・時々使用している」が 42%で、2/3 の方は「使いやすい」と感じていた。一方、「あまり使用しない・使用していない」に関してはその他を除くと「必要を感じない」が 25%であったが、83%の家族が「今後使用したい」と手帳には肯定的であった。53%の専門職で手帳を持ってこられるとのことで、持ってこられている 65%の施設で「活用している・時々活用している」されており、8 割以上で「利用者に役に立っている・少しは役に立っている」と回答がみられた。かかりつけ医からでは、「持ってこられる・時々持ってこられる」が 42%で、手帳を持参されていたかかりつけ医では「利用者に役に立っている」「少しは役に立っている」のいずれかであった。

家族、福祉、かかりつけ医いずれもが手帳の必要性は感じているものの、利用の仕方はさまざまである。また急な受診や入院の際に手帳を持参しないケースが少なくないことから、本当に浸透し、十分に活用されるためには時間を要すると考えられる。

## A . 研究目的

認知症の診断を受けた人が、デイサービスやショートステイ、施設入所などの福祉施設を利用したり、通院や入院において、嘱託医や介護専門職、かかりつけ医にこれまでの受診や治療の経緯がわかり、本人に応じた適切なケアや治療が提供されることを目的とした、「医療-介護連携のための火の国あんしん手帳【愛媛版】」（以下、手帳）を活用していただく。また、手帳の利用状況や実際に利用しての感想を、介護者家族（以下、家族）、介護・福祉専門職（専門職）、かかりつけ医にアンケートを行い、手帳の有用性について検討することを目的とする。

## B . 研究方法

愛媛大学医学部附属病院（愛大）を受診し、認知症と診断された本人・家族に本研究の趣旨を説明し、同意を得た家族にきちんと保管するように指導し手帳を配布した。その後、手帳の利用状況や使いやすさなどについて家族、介護専門職、か

かりつけ医にアンケートを実施した。アンケートは無記名とし、愛大を受診フォローする家族を除き、原則郵送にて行った。

（倫理面への配慮）本研究は愛媛大学医学部が定める倫理委員会の承認を得た。手帳を配布する前には本人・家族から文書による同意を得て行った。

## C . 研究結果

86 人から同意を得、手帳を配布した。配布したうち、57 人がデイサービスなどの介護福祉施設（67 箇所）を利用していた。また、かかりつけ医でフォローされている医療機関は 32 か所であった。これらに前述の方法でアンケート用紙を配布し、64 家族（74%）、47 施設（72%）、19 かかりつけ医（59%）から回答を得た。

### 【家族】

使用状況は、「使用している」26%、「時々使用している」16%、「あまり使用していない」40%、「全く使用していない」は 18%であり、4 割強の家族

が手帳をしようしていた。使用しない理由としては、その他・未記入を除くと、「必要を感じないため」が25%と最も多かった。手帳の使いやすさでは、「非常に使いやすい」という回答はなかったものの、3人に1人の使用者(35%)は「使いにくい」と感じていた。使用しにくい理由としては、『忙しそうにしているので外来に持って行っても出せずにいる』や『外来の受付で出すとこれは違いますといわれた』といった回答が散見した。しかし、現在あまり使用していない家族も含め「今後も使用したい」との回答は83%にも上った。手帳に記載情報としては、「追加の必要なし」83%、「不要な項目なし」93%で、おおむね必要な情報が盛り込まれていると判断される。しかし、自由記載欄の中には、『女性だけの世帯であるため、何もかも情報を書くのは不安も大きい』、『(施設利用時に)どんなスタッフがみているのかわからないので心配』といった記載がみられた。

#### 【専門職】

手帳の使用は、「持ってこられている」30%、「時々持ってこられる」21%と併せると5割強で、デイサービスやショートステイなど介護福祉施設利用時に「あまり」あるいは「まったく」持参されていない状況であった。専門職サイドが手帳を活用しているかに関しては、あまり持ってこられないとの回答のあった専門職も含め「活用している」と「時々活用している」あわせて65%であった。その他・未記入を除けば、かかりつけ医療機関の記載と認知機能スケールが情報として活用されていたが、お薬の情報や検査情報の活用は高くなかった。手帳を活用することによる改善点としては、無記入を除くと「医療機関との情報交換がスムーズになった」が最も多く、次いで「よいケアができるようになった」、「必要な情報が入手しやすくなった」と続いた。一方、「あまり使用していない」、「使用していない」理由としては、「タイムリーな情報が得づらい」、「デイで用いている連絡帳と統一が図れればよい」、「ページ数が多いため確認に時間がかかるので、新たに記入された

ページに付箋をしてくれたら助かる」といった記載がみられた。また、自由記載欄には『『連絡ノート』に加え、『先生に伝えたいこと、困っていること』の項目の中で特に本人の様子の変化を把握し易い項目を簡単にして(10項目くらい?) 毎受診時にチェックし、状態を確認してはどうか』や『介護サービスをまだ利用されていない方や同じ立場の方が集う家族会などでの情報を記載したシートなどもあると、家族や先生や専門職に相談などがしやすい』などの意見が寄せられた。

#### 【かかりつけ医】

かかりつけ医の53%で患者の方が手帳を「持って来られている」、「時々持って来られる」と回答した。しかし、「活用している」、「時々活用している」は46%であった。役立つ情報としては、「お薬情報」が最も多く、アルツハイマー型認知症の患者で今後の経緯について情報記載をした内容に『処方箋の意図まで記載しているのに感心』と記載がみられたものがあった。手帳を活用していない理由としては、その他で「患者が持って来ない」という回答がほとんどであった。また、それぞれの診療において独自にも、もの忘れ問診票とフェイスシート、あるいは製薬会社が作成している「ノート」を利用しているとの回答があった。患者(家族)にお役立っているかとの質問には、否定的な回答は見られなかった。

#### D. 考察

今回の手帳の使用状況をみると、家族が使用しているのが4割強であった。この理由としては、14名が若年発症の認知症であり、社会福祉資源の活用に至っている人が少なかったことが考えられる。また、症状が軽度であることや、症状が安定していると改めて記載する必要がないと考えられていることがあげられる。家族と福祉施設とのなかでは、デイサービス利用時に使われている連絡帳との使い分けをどうしたらいいのか戸惑っていることが少なくなかった。家族と医療機関との関係においては、アンケートの回答では見られなか

ったが、かかりつけ医以外の急な体調不良による入院に際し、手帳が十分使用されていないことがあげられる。専門職は「医師との意見交換が図りやすくなった」と感じられる反面、本当に困った時に、なかなかタイムリーな情報のやり取りができない不便さを感じていた。かかりつけ医では、手帳に関して否定的な回答はほとんど見られなかったが、役立つ情報として、「介護サービス利用状況」は少なく、多職種との情報共有というよりは、「お薬情報」が最も役立っているという興味深い結果であった。アンケート回答の中ではこのような結果であったが、実際に当院受診時に持参される手帳を拝見すると、非常によく使われている印象のある手帳もあれば、当初は手帳が移動するのみでなかなか記載のない例も少なくない。手帳の必要性は家族、専門職、かかりつけ医いずれもが必要と感じている。手帳を持つものが、それぞれの必要性のなかで使用していくのがよいと考えられる。ただ、この人は使用した方がよいと考えられる場合には、最初に配布するものが、介護福祉施設やかかりつけ医に何らかのメッセージを記載し、家族に「○●(介護施設やかかりつけ医)宛に本人の様子を書いているので見せてください」と手渡すことから始めることが重要であると考えられた。

## E . 結論

手帳を配布して家族、専門職、かかりつけ医から使用状況などのアンケートを行った。それぞれの立場で、連携が必要であること、また有用であると感じていることが示された。配布時に専門職やかかりつけ医に患者の様子を連絡欄に記載し置くことが、手帳を使用してもらうためには大切である。しかし、使用されるに至っても、いざ本人が急な受診や入院になった際に手帳を持参することは多くないようである。タイムリーな情報のやり取りをどうすれば図れるのか、既存のノートや連絡帳と本手帳をどう連携すればよいのか、今後の課題もみられた。

## F . 健康危険情報

なし

## G . 研究発表

### 1. 論文発表

小森憲治郎, 谷向 知, 数井裕光, 上野修一. 意味性認知症の臨床像から. *基礎心理学研究* **33**(1): 1-9, 2014.

谷向 知. 症候学から認知症の人を理解する.-「日常診療に必要な認知症症候学,池田学編, 新興医学出版(東京)2014;pp178-180

Mori T, Shimada H, Shinotoh H, Hirano S, Eguchi Y, Yamada M, Fukuhara R, Tanimukai S, Kuwabara S, Ueno S, Suhara T. Apathy correlates with prefrontal amyloid beta deposition in Alzheimer's disease. *J Neurol Neurosurg Psychiatry*. 2014 ;**85**: 449-455

### 2. 学会発表

小森憲次郎, 豊田泰孝, 吉田 卓, 森 崇明, 谷向 知. 失名辞と緩徐に進行する近時記憶障害を呈した側頭葉前方部萎縮例. 第 38 回日本神経心理学会学術集会. 2014.9.26-27(山形)

小森憲治郎, 豊田泰孝, 森 崇明, 吉田 卓, 清水秀明, 谷向 知, 上野修一. 緩徐な進行を示した意味性認知症例の語彙消失過程に関する検討. 第 38 回日本高次脳機能障害学会. 2014.11.28-29(仙台)

## H . 知的財産権の出願・登録状況

### 1. 特許取得

なし

### 2. 実用新案登録

なし

### 3. その他

なし